

「小原台だより」への投稿

「自衛隊という素晴らしい組織」

18期（空） 織田邦男

今年の春、35年間着なれた制服を脱ぎました。防大に入校した直後、明日やめようか、明後日やめようかと思ひ悩んだ日々が、ついこのあいだのように思い出されます。あれから39年間、防衛庁、防衛省には「よくぞ、ここまで育ててもらった」と感謝の気持ちで一杯です。

高校時代の同級生も、そろそろ退職時期を迎え、故郷に帰った時、酒を酌み交わしながら、お互いの人生を振り返る機会があります。その時ほど、自衛隊と一般企業との違いの大きさを再認識させられることはありません。

「事に臨んでは危険を顧みず」任務に邁進しなければならないという違いはもちろんあります。それより目立たないですが、意外と見過ごしている大きな違いに気が着きました。それは一般の企業が「個人の能力の消費」を要求する組織に対し、自衛隊は「個人の能力の貯蓄」が求められる組織という違いです。

企業は当然ですが短期的な業績が求められます。社員の業績の総和で企業が成り立っている以上、個人の高い能力を企業の為に目一杯発揮してもらわなければなりません。しかしながら能力は常に磨かねば擦り減り、陳腐化し消耗します。忙しさにかまけて自分への投資を怠っていると、際立った能力を持っていた人もただの人になり、会社にとって無用の存在になり下がってしまいます。目一杯働かされた揚句、弊履の如くリストラされる現代の悲劇が昨今取りざたされていますが、市場原理で動く企業にとっては当然と言えば当然です。事実、昔とてつもなく優秀だった同級生がリストラの憂き目にあった事例をいくつも聞きました。

一方、自衛隊は百年に一度あるかないかの国家危急存亡の際に、立派に働けるよう、日頃から実力を蓄えておくことを生業とする組織です。従って、常日頃から各個人が自分に投資し、ポテンシャルを高め、いわば「能力の充電」が求められます。自衛官の心構えに「個人の充実」がある所以です。言いかえれば、「自分自身を高めるために日々頑張る」ことが求められ、自分自身の為に頑張る」ことがひいては国の為になるという有難い組織なのです。

防大を含め39年間、私も様々な教育を受け、能力の向上を求められ、自己研鑽によって自己充電に心がけてきました。部隊では日々、気力、体力、徳力の向上が求められ、知識や技能の練磨が要求されました。その集大成として「如何に敵を倒すか」に焦点を絞り、一生懸命汗を流してきました。し

かも、面白いことに、汗して得た戦技や戦法が決して使われないことを祈りながらです。まさに「我が汗、無駄なれ」と祈りながらの35年間でした。我々の汗が結実せず、使われないことが日本にとって最も幸せという類まれな組織だからです。

一般企業にとっては、そうはいきません。毎日の汗が結実しないようであれば、早晚その企業は倒産するでしょう。各個人の能力の充電より、放電、あるいは消費の方が重視されるのは当然といえども当然かも知れません。

同級生に何十年かぶりに再会した時、昔、優秀で颯爽としていたイメージが、今は使い古された雑巾のように変貌している同級生を見ることがあります。放電し尽くした使用不能のバッテリーのような変貌ぶりには驚かされませんが、そういう人に限って、入社直後から高給取りの企業戦士として一心不乱に働いて来た人達が多いようです。放電量が充電量を上回った結果がその変貌ぶりに現れたと言えるのでしょう。

長年の充電努力の差異は歴然して現れます。我々の年になりますと、もうその個人差は取り返しがつかないでしょう。

自衛隊と一般企業の違いを実感するとき、防衛省、自衛隊という組織はつくづく素晴らしい組織であり、本当にお世話になったと感謝の気持ちがこみ上げてきます。

「我らここに励みて、国安らかなり」という言葉があります。戦わずに平和を保つのが理想です。優れた兵器体系を保有し、自衛官一人一人が日々、個人の充実を図り、戦技戦法を磨き、精強な存在でいることが最大の抑止力なのです。「自分の為に頑張る」＝「抑止力向上」＝「国の為」という素晴らしい組織に所属した幸せを本当に感じる次第です。

35年間、自分自身を磨き、戦技戦法を練磨し、精強な存在実現に汗してきました。結果として「殺すこともなく、殺されることもなく」、「国安らかな」状態で無事任務を終えることができた喜びはこれに優るものありません。我を育ててくれた防衛省、自衛隊に感謝あるのみです。